

大矢和憲の社会科（第3学年）研究計画

1 本研究の位置付け

小学校社会科では、問題解決的な学習を通して、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことが求められている。そのためには、社会的事象を客観的にとらえるだけでなく、自らを社会の一員として自覚し、社会的事象を主体的にとらえることが大切である。特に、社会科入門期の中学年においては、社会的事象と自分の生活とのかかわりを感じながら知識や概念を身に付けることが大切である。

そこで私は、中学年社会科において、生活者としての自分の認識や経験を基に身近な地域の社会的事象について追究し、**社会的事象の特色（社会の仕組み、工夫や努力、思いや願いが表れている事実）を自分の生活と関係付けてとらえる子ども**の姿を目指す。なぜなら、このような子どもは、社会的事象が自分の生活にとってどのような影響を及ぼしているのかや、自分が社会的事象にどのようにかかわっていけばよいのかなどと、社会的事象と自分の生活とのかかわりを実感し、社会的事象を主体的にとらえることができるからである。

これまでも子どもにとって身近な社会的事象を教材として採り上げ、問題解決的な学習を通して、社会的事象の特色を追究させてきた。しかし、子どもの考えは「事実の目的はお客さんのためだ」などのように、論理的に社会的事象の特色を明らかにすることに止まり、第三者的な立場で客観的に知識や概念を身に付けることが多かった。このような理解の仕方では、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎となる主体性が育まれない。

その原因は、社会的事象の特色について追究させる場面で、自分の生活とのかかわりを感じさせながら、特色の背景にある目的や原因、効果などについて考えさせる手立てが不十分だったからである。この場面でこそ、生活者としての自分の認識や経験を基に追究させるのである。

そこで私は、まず、社会的事象の特色の背景にある目的や原因、効果などについての疑問を焦点化し、学習問題として設定する。

次に、学習問題について考えている場面で、子どもが予想している立場や観点を整理し、視覚化することで、問題解決の手掛かりとなる立場や観点を共有させる。その上で共有した立場や観点が表れており、かつ子どもが自分の実生活を想起することができる資料を提示し、学習問題について考えさせる。その際、何を基に考えているのか予想の根拠を具体的に表出させる。なぜなら、ここでの考えの基にしているものが、生活者としての自分の認識や経験だからである。こうして、学習問題に対して生活者としての自分の認識や経験を基にした仮説を立て、学習問題を解決した子どもは、自分と社会的事象とのかかわりを感じ、社会的事象の特色を単なる事実の認識ではなく、自分の生活と関係付けてとらえられるようになる。

2 主張する働き掛け

まず、子どもの既存の認識や生活経験との間にずれを生む教材を提示する。教材は、未知の事実を含んだ教材、既存の認識と相反する事実を含んだ教材、予想を超える違いを含んだ教材などである。これにより、子どもは、既存の認識や生活経験、教材を基にして考え始めるが、思っていたことが当てはまらなかったり、これまでの認識ではうまく言えなかったりして、どうしてなのかや何のためなのかなどと、採り上げた事実について疑問をもつ。

そこで、採り上げた社会的事象の事実に対して、子どもが疑問に思ったことを問う。子どもは、「～なのになんで～なのだろうか」、「どうしたら～になるだろうか」などと、採り上げた事実についてもった疑問を話し始める。このとき、子どもが何を基に疑問に感じたのかや、どのようなところに疑問を感じたのか、どうなっていると思っていたのかなど、子どもの既存の認識や生活経験を引き出し、驚きや疑問を焦点化していく。そして、どのような学習問題がつかれそうかを問い、子どもにこれから明らかにしたい学習問題を設定させる。

働き掛け1

学習問題に対する予想を発表させ、問題解決の手掛かりとなる立場や観点をマトリクス図に整理する。

学習問題を設定した子どもは、既存の認識や生活経験を基に学習問題について予想を始める。このとき子どもは、個々に様々な立場や観点を予想をしている。そこで、子どもの予想を発表させる際、どのような立場や観点を予想しているのかを問い、立場や観点を分類・整理して板書する。こうすることで子どもは、問題解決の手掛かりとなる立場や観点を共有することができる。

働き掛け2

共有した立場や観点から、自分の実生活を想起することができる資料を提示し、学習問題についてどのようなことが言えそうかを問う。

問題解決の手掛かりとなる立場や観点を共有した子どもに、共有した立場や観点から、自分の実生活を想起することができる資料を提示し、学習問題についてどのようなことが言えそうかを問う。子どもは社会的事象と自分の生活とのかかわりを感じながら、生活者としての自分の認識や経験を基に、学習問題についての考えを焦点化していく。このとき、何を基にそう考えたのかやどうしてそう考えたのか、考えの根拠を問う。なぜなら、この場面で生活者としての自分の認識や経験を引き出し、それらを基に仮説を立てさせていくことが、自分の生活と関係付けてとらえさせるために重要だからである。そのために予想の根拠を具体的に引き出し、発表させるようにする。子どもは、「もしも～だったらこうなる。だからこのようにしている（なっている）のだろう」と仮定して考え、生活者としての自分の認識や経験を基に、学習問題について考えるようになる。そこで、考えをまとめるとどのようになるかを問い、学習問題について学級全体の仮説を考えさせる。

働き掛け3

どのようなことが分かれば仮説を確かめられそうかを問い、必要な情報を集める方法を考えさせる。

仮説を立てた子どもは、自分たちの立てた仮説が正しいのかどうか確かめたい。そこで、仮説を確かめるためにはどのようなことが分かればいいのかを問う。子どもは、「こういうことが分かればいい」と、仮説を確かめるために必要な情報について考える。そのような子どもに、どうやって調べたらよいかを問い、必要な情報を集める方法を考えさせる。子どもは、「こうやって調べたい」と、追究意欲をもって調べる方法を決定する。

働き掛け4

調査活動を設定したり、ゲストティーチャーに出会わせたりし、仮説を確かめるために必要な情報を収集させる。

仮説を確かめるために必要な情報と、その収集方法を決めた子どもに、調査活動を設定したり、ゲストティーチャーに出会わせたりする。子どもは、調査活動やゲストティーチャーの話から、仮説を確かめるために必要な情報を収集し、仮説の正否を確かめる。

働き掛け5

学習のまとめとして、分かったことや考えたこと、思ったことを説明させる。

仮説の正否を確かめ、学習問題を解決した子どもに、学習のまとめとして、分かったことや考えたこと、思ったことを問い、説明させる。子どもは、「このような特色があるから、自分はこうすることができるんだ」、「このような特色があるから、自分はこうしたい」と関係付けて考え、生活者としての自分の認識や経験と、社会的事象の特色とを結び付け、社会的事象の特色を自分の生活と関係付けてとらえる子どもの姿となる。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 想定した思考の方法を促す働き掛けにより、既習事項をもち出させることができたか。
- ② 想定した思考の方法を促す働き掛けにより、目指す姿になったか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け2の後で、仮定する思考の方法を使って生活者としての自分の認識や経験をもち出して考えているかどうかを、ワークシートの記述や発言から検証する。
- ② 働き掛け5の後で、身近な地域の社会的事象の特色を自分の生活と関係付けてとらえているかどうかを、ワークシートの記述から検証する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業(7月) 「進め! スーパー調査隊」(14時間)
- (2) 中間検討会(9月) 「進め! ぼくらの牛乳調査隊」(14時間)
- (3) 初等教育研究会(2月) 「進め! 昔のくらし調査隊」(16時間)